

「尽きない糧」

列王記上 17：8 - 16

北イスラエル王国のアハブ王は、シドン人の王エトバルの娘イゼベルを妻に迎え、彼女のためにバアル礼拝のための聖所をサマリアに建てさせ、自らも進んでバアルにひれ伏すことを行いました。アハブは、イスラエルにおける宗教的混交を強めていきました。それゆえ北王国は、このまま行けば完全にバアル礼拝に飲み込まれてしまうような深刻な事態となっていたのです。

この暗黒の時代に突如としてエリヤは登場します。エリヤが戦った敵はバアルという偶像礼拝でした。バアルは太陽と雨を司る豊穡の神と言われていました。パレスチナは乾燥地帯ですから、雨季に雨が十分に降らなければ人々は飢えて死んでしまいます。そのため、カナン地方に住む人々はバアルを崇拝していました。イスラエルの民も主なる神ヤハウエを忘れ、このバアルを礼拝していきました。彼らにとっても、雨を降らして自分たちを豊かにしてくれるバアルは、とても魅力的だったのでしょう。人間が求める神とは、雨を降らし、病を治し、他の民族から守ってくれる神、つまり、自分に利益を与えてくれる神、自分に都合の良い自己中心的な神です。けれども、それこそが偶像礼拝にほかなりません。

エリヤは、バアルへの大胆な挑戦として干ばつの預言をします。エリヤは、雨と豊穡をもたらすと信じられていたバアルに対して、「主なる神が雨を降らせない」と言ったのです。つまり、雨を支配するのはあなた方の信仰するバアルではなく、主なる神であることを教えたのです。

このような災いをもたらす預言者は、王にとっては不都合な憎むべき存在です。ですからエリヤは命を狙われることになります。そこで神さまは、エリヤをアハブから逃れさせ、ヨルダンの東側にあるケリト川のほとりに身を隠させました。その後、さらに干ばつが激しくなると、今度はシドンのサレプタにいるやもめのもとに行けと言われました。神さまは、そこで貧しいやもめを通して預言者を養おうとされるのです。

やもめは息子と二人で暮らしていました。二人の生活は貧しく、食べ物は一食分にも満たない、わずかなものしかありませんでした。「一握りのパンの粉と少しの油で食事をして死のう」というほどに、彼女たちは切羽つまった状況にいました。そのやもめにエリヤは水と一切れのパンを求めました。やもめは、エリヤの言葉を信じてその通りにしました。もちろん、彼女にはこの要求を拒否することもできました。初対面のエリヤに対して、この親子には何の借りもないし、エリヤの願いを拒んだとしても非難する人はいないでしょう。でも、彼女はエリヤの言ったとおりにしたのです。

たきぎ二本、小麦粉一握り、そして少しの油。これらがやもめの親子が持っていた全財産でした。はたして、こんなわずかなものから何かが起こると想像できるでしょうか。「主が再び地に雨を降らすその時まで、つばの粉は尽きず、かめの油は絶えない」と言われたって、にわかには信じがたい。それが常識的な考えです。しかし、そのような時こそ、私たちは問われているのです。「私は本当に神様に従っているのか？本当に神の国と神の義を第一に求めているのか？」と。

そのような時、御言葉に聞くことよりも、まず世のものを頼りにして、神様を二の次にしてしまっていることはないでしょうか。私たちはしばしば、神様を信じていると言いながらも、本当は信じ切れずに保険として別のものを頼っていたり、自分にとって都合の悪くなる事態を回避する為の策を張っていたりすることはないかと、今一度、自分に問いかけてみたいと思うのです。

あのやもめは、子どもと食べる最後の食事をエリヤに分け与えました。もし、それを惜しんでいたなら、この驚くべきことを目の当たりにすることはなかったでしょう。彼女自身が言っているように、最後の食事をして、この親子は死んでしまっていたかもしれません。しかし、神をまず第一にして従った時、その時に、この親子は思いもしなかった、想像もしなかった神の御業を見ることになったのです。

信仰をもって私たちが一步を踏み出す時、驚くべき世界が開けて行きます。それがどういう形なのか私たちには分からないことも多々あります。祈っても、私たちの願い通りのことが与えられるとは限りません。祈りが聞かれないかのように思うこともあります。けれども、神さまを信じ、神さまの御言葉に聞き従おうとする者の祈りは、必ず顧みられるのです。

イエス・キリストはこう言われます。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。」(ヨハネ 6：35)